



開館35周年記念特別展

初期伊万里 朝鮮陶磁

2023年1月15日(日)～3月26日(日)

朝鮮半島の技術が伝わり、1610年代に日本初の国産磁器である伊万里焼が誕生しました。中でも初期の素朴な作風を「初期伊万里」と呼んでいます。戸栗美術館創設者 戸栗亨（1926～2007）は「古伊万里のコレクションで日本一になる」という目標を掲げ、蒐集に邁進しました。「鑑賞陶磁」としては端正な作品が好まれ、色絵重視の風潮が強かった時代に、染付や白磁の、陶工達の手痕が感じられる様な滋味溢れる初期伊万里も精力的に集めます。こうして昭和40年代ごろから20年ほどの間に江戸時代を通観しうる充実した肥前磁器コレクションを築きました。

「始まりというものは大事なものだー、私はそういうところに愛着を感じるんです」。これは古伊万里と対峙する戸栗の言葉ですが、伊万里焼の祖である朝鮮の陶磁器に対しても親しみの眼差しを向けていました。数は決して多くありませんが、高麗青磁や粉青、鉄絵、白磁、青花など、少數ながらも体系を意識した素朴な美しさの作品が目立ちます。

開館35周年記念特別展の締めくくりとなる今展では、古伊万里の“原点”たる初期伊万里の魅力を約80点の作品と共に語ります。更に、戸栗の愛した朝鮮陶磁コレクション約30点も15年ぶりに一堂に会します。

主な出展作品

初期伊万里

江戸時代に実用品であった伊万里焼は明治以降「鑑賞陶磁」として評価されていきます。愛好に比例するように昭和20年代以降に活発化した陶磁器研究によって、伊万里焼の分類が進みました。その中でも特に古いものにつけられたのが「初期伊万里」という呼び名です。読んで字の如く初期の伊万里焼のことを指しています。昭和30年代頃から評価され始めた初期伊万里は、陶工達の手仕事が感じられる親しみやすさで人々の心を掴みました。

技術は朝鮮半島、文様は憧れの中国磁器

①染付 吹墨白兔文 皿

伊万里 江戸時代（17世紀前期）口径 21.0cm

1610年代に日本で磁器が作られるようになるまで、その供給は主に磁器大国であった中国からの輸入に頼っていました。そのため伊万里焼にも、憧れの中国磁器のスタイルが求められたのでしょう。

兎・雲・短冊の形に切った型を置き、呉須（ごす）を吹き掛けて白抜き文様を浮かび上がらせる吹墨（ふきずみ）の技法を用いています。吹墨は中国の古染付に見られる技法。初期伊万里の文様にはこうした中国磁器の影響が多く見られます。



磁器の一大産地への道程

②染付 山水文 鉢

伊万里 江戸時代（17世紀前期）口径 34.7cm

先行研究によれば、伊万里焼は有田の西側で唐津系陶器との併焼からその歴史がはじまったと言われています。本格的に産業化するのは原料となる泉山陶石の発見や1637年の窯場の整理統合以降のこと。磁器専焼の生産体制を整えていきました。

見込に山水文、縁には葉を点状にあらわした菊唐草文をめぐらせた大鉢。呉須・胎土・釉薬などの原料の精製が充分でなく、絵付けは暗い発色になりますが、かえって深みを感じさせる仕上がりです。



発掘調査によって見出された初期伊万里

③染付 梅樹唐草文 瓶

伊万里 江戸時代（17世紀前期）高 19.4cm

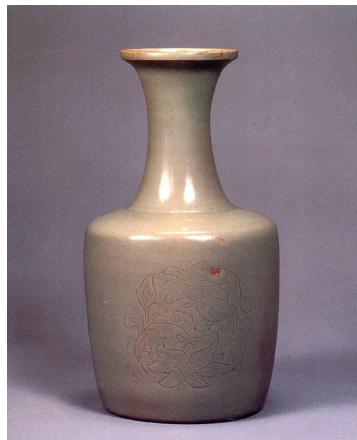
昭和30年代頃より、調査研究や発掘調査の進展に伴って初期伊万里の愛好と再確認が広がっています。特に「堅筋形（たてすじがた）」と呼ばれていた瓶は、当時「李朝染付」として愛好されていましたが、発掘調査が進む中で初期伊万里焼として知られるようになりました。

輶轤（ろくろ）で成型した後、仕切りの畝（うね）を残して面取りした、初期伊万里に多く見られる鎬（しのぎ）形の瓶。佐賀・有田の中でも早期の窯である小溝窯上跡（こみぞかまうあと）や天神森窯跡（てんじんもりかまあと）で器形の類似する陶片が出土しており、資料的にも貴重な作品です。



朝鮮陶磁

伊万里焼は、「文禄・慶長の役」の際に朝鮮人陶工が連れ帰られたことをきっかけに誕生します。創設者 戸栗享は伊万里焼の祖である朝鮮半島の陶磁器に対して、親しみの眼差しを向けていました。主眼を古伊万里とした後も、気になった朝鮮陶磁は買い求めたと言います。コレクションの朝鮮陶磁は数こそ多くありませんが、体系を意識した蒐集が特徴です。ここでは戸栗が特に愛好した作品をご紹介いたします。



“雨過天青”を思わせる高麗青磁

青磁 花唐草文 瓶

高麗 高麗時代（12～13世紀）高 19.4cm

高麗王朝時代（918～1392）に作られた青磁を「高麗青磁」と呼びます。朝鮮半島の陶器や越州窯をはじめとする中国陶磁の影響のもと特に12世紀から13世紀にかけて発展しました。本作は中国宋時代に作られた砧形の瓶を祖形とする器形の瓶。戸栗の言によれば、青よりも灰色に近い青磁の色合いについて中国・汝官窯を思わせるとし、コレクションの高麗青磁の中でも特に良いものと述べています。胴三面に二輪の花を組み入れた唐草文を細い線刻であらわした、落ち着いた印象の作品です。

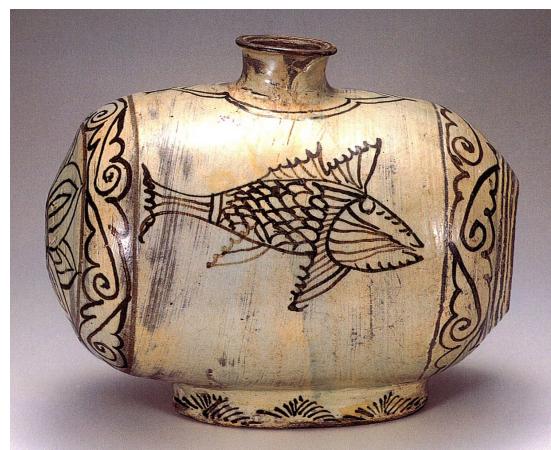
力強く、どこまでも自由な粉青鉄絵

④粉青鉄絵 魚文 俵壺

朝鮮 朝鮮時代（15世紀後半～16世紀前半）長 23.9cm

末期の高麗青磁から発生した「粉青沙器（ふんせいさき）」は、素地に白化粧を施し、灰青がかかった透明釉を施したやきもの。朝鮮王朝時代のうち、15世紀から16世紀にかけて作られました。

「粉青鉄絵（ふんせいてつえ）」は器面全体に刷毛などで白化粧を施した後、その上から鉄絵具で文様を描いたもので、15世紀後半から16世紀前半にかけて忠清北道鶴龍山（ちゅうせいほくどうけいりゆうざん）を中心とする地域で発展します。本作は胴部中央に鉄絵で大きく魚文を描いた俵壺（たわらっぽ）。堂々とした魚や蔓草文ののびやかな表現は、同窯特有の飄逸な作風です。



素朴な風合いの青花

⑤青花 秋草文 瓶

朝鮮 朝鮮時代（18世紀前半）高 33.7cm

朝鮮陶磁における青花の製作は15世紀中頃からとされています。しかし、その後長らく時代の趨勢に左右され生産は不安定でした。18世紀以降には、様々な器種、文様の青花の作例が目立ちます。

細い首を持ち肩が張った瓶。裾部に圈線を引いて地面とし、胴部3ヶ所に草花文と竹文を描いています。少し灰がかかった滋味のある素地（きじ）に淡い発色の青花で繊細に草花を描くのはこの時期の特徴。大きくとった余白と相俟って夢げな風情を醸し出しています。このような作風の朝鮮時代の青花を、日本では「秋草手（あきくさで）」と呼んでいます。

※作品①～⑤および展覧会ポスターの写真データ等をご用意しております。ご入用の際は、お手数ですが別紙写真借用申請書をお送りください。また、ご取材も隨時承っております。お気軽にお問合せくださいませ。

展覧会紹介文

どうぞご活用ください。

■ 20word

初期伊万里約80点と朝鮮陶磁約30点を展観。

■ 100word

開館35周年記念特別展の締めくくりとなる今展では、古伊万里の“原点”たる初期伊万里の魅力を約80点の作品と共に語ります。更に、創設者戸栗享の愛した朝鮮陶磁コレクション約30点も15年ぶりに一堂に会します。

展覧会情報

名称：『開館35周年記念特別展 初期伊万里・朝鮮陶磁』
会期：2023年1月15日（日）～3月26日（日）
会場：戸栗美術館
所在地：東京都渋谷区松濤1-11-3
開館時間：10:00～17:00（入館受付は16:30まで）
※金曜・土曜は10:00～20:00（入館受付は19:30まで）
休館日：月曜・火曜
※3月21日（火・祝）は開館。
入館料：一般1,200円/高大生500円
※中学生以下は入館料無料。
※1月15日（日）から29日（日）まで、新成人は入館料無料。受付にて年齢のわかるものをご提示ください。
交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分・地下鉄A2出口より徒歩12分
京王井の頭線神泉駅北口より徒歩10分
※当館には駐車場はございません。近隣のコインパーキングをご利用ください。
同時開催：『伊万里焼誕生物語』（1階やきもの展示室）
伊万里焼誕生から日本の一大窯業地に至った歴史的背景を出土品や文献から探ります。陶祖の系譜である十四代李參平氏の作品も展示。現代に繋がる技術の“原点”に迫ります。

本展覧会会期中の催し物のご案内

ラウンジトーク

「『開館35周年記念特別展 初期伊万里・朝鮮陶磁』の見どころ」

1階ラウンジにて、スライドを使って展覧会の見どころをご紹介いたします。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください（予約不要）。

■2月18日（土）、3月8日（水）各日10時15分～（約45分）
■各日先着20名様 ■参加費無料

ラウンジ&ギャラリートーク
「戸栗コレクションの朝鮮陶磁」

前半は1階ラウンジにて、戸栗コレクションの中の朝鮮陶磁をご紹介し、後半は2階展示室にて展覧会の展示解説を行います。

■2月27日（月）14時00分～（約120分）
■先着20名様 ■参加費1,500円（税込／入館券を別途お求めください。）
■要事前予約

次回展予告

「柿右衛門」の五色

－古伊万里からマイセン、近現代まで－

2023年4月8日（土）～6月25日（日）

素地や絵具の色に注目して、江戸時代と近現代の「柿右衛門」作品約80点を展観いたします。



色絵 花鳥人物文 蓋付六角壺

伊万里（柿右衛門様式）
江戸時代（17世紀後半）
通高31.4cm

お問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館 広報担当宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3

TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813

URL: <http://www.toguri-museum.or.jp/> E-mail: kouhou@toguri-museum.or.jp